

2026.05.10.

## 「わたしの父は誰か」

旧約 イザヤ書6章15～19節

新約 ヨハネによる福音書8章39～47節

### 1. はじめに

先週、イエス様が「**真理はあなたたちを自由にする。**」と告げられた言葉を、私共に告げられている言葉として聞きました。この「真理」というのは、神様・イエス様のことであり、神様・イエス様によって示された御心を指しています。つまり、神様が罪人である私共を愛してくださり、独り子であるイエス様を与えてくださり、イエス様が私共の罪の贖いとなってくださった。イエス様が私共の罪の裁きを全て引き受けるために、十字架にお架かりなられた。そして、復活させられた。このことによって私共は一切の罪を赦していただき、神の子としていただき、永遠の命をもいただいた。これが私共に与えられた救いであり真理です。この真理に与り、この真理に生きるとき、私共は罪の奴隷状態から解放され、喜んで神様の御心に従って生きる者としていただきました。これが私共に与えられている「まことの自由」です。「罪からの自由」そして「神様への自由」に生きているからです。自分の罪や、自分の欲に引きずられて生きるのであれば、それは少しも自由ではないでしょう。自分の罪や欲が私共の主人あるからです。しかし、私共は既にそのような不自由な者ではありません。

### 2. イエス様とユダヤ人の論争

今朝与えられている御言葉は、そのような「まことの自由」に生きる者は、ユダヤ人なのか？それともイエス様を「わが主、わが神」として受け入れ、信じる者なのか？そのことが論じられています。論じられていると言いましても、冷静な議論がなされているわけではありません。大変厳しくイエス様とユダヤ人との間で為された論争、論戦、激論が記されています。どうしてこんなに激しい論争になってしまったのか。それはここでの論争の中心が、誰がアブラハムの子であるのか、誰が神の子なのかという問題だからです。つまり誰が救われるのかという、救いの中心テーマについて論じられているからです。これはイエス様とユダヤ人たちが、決して妥協できない、曖昧にすることが出来ない問題でした。キリスト教と言えば「愛の宗教」ではないか。だから、自分と違う多様な意見であっても受け止め、認め合うのが筋ではないかと思われる方も多いでしょう。しかし、イエス様は救いの筋道ということに関しては、決して曖昧にはされませんでした。そこを曖昧にしまえば、イエス様ご自身、何のために来られたのか、どうして十字架にお架かりにならなければならないのか、このことの意味が全く分からなくなってしまうからです。パウロの言葉で言えば「十字架を無駄にする」ということになってしまうからです。イエス様はそれだけは出来ませんで

した。そして、ユダヤ人もまたイエス様を神様の独り子として認めることは断じて出来ませんでした。もしそれを認めてしまえば、自分たちが作り上げてきたユダヤ社会における常識、すなわち律法を守り神様の御前に正しい人となって救われるということを、自ら否定してしまうことになるからです。つまり自分たちの救いの根拠を失ってしまうからです。

具体的に見ていきましょう。

### 3. アブラハムの子孫は誰か

第一の論点は、アブラハムの子孫は誰か？という問題です。ユダヤ人にとって、自分たちはアブラハムの子孫であるということは、疑いようのないことであり、自分たちの民族的誇りの源泉でした。アブラハムというのはイエス様の時代から千数百年前の人で、神様から召命と約束を与えられて最初の神の民となった人です。アブラハムにはイサクが与えられ、イサクにはヤコブが与えられ、ヤコブには12部族の祖となる男の子が与えられ、その子孫達がそれぞれ神の民イスラエルを構成する12部族となりました。そのイスラエル民族の中のユダ族とベニヤミン族の子孫達がイエス様の時代のユダヤ人達でした。その他の10部族はどうなってしまったかと言いますと、サマリア人になったりしてユダヤ人から見れば神の民ではなくなってしまったと理解されていました。ですから、イエス様の時代「アブラハムの子孫である神の民とは、自分たちユダヤ人以外にいない」というのがユダヤ人達の誇りであり、自分たちが救われることの大きな根拠の一つでした。ですから、彼らは「わたしたちの父はアブラハムです」(39節)と言ったわけです。自分たちはアブラハムの子孫であり、神の民であり、特別な民であり、救われる民だ。そして、この救いに与るために、自分たちは神様が与えてくださった律法を守っている。だから、自分たちこそが「神様のみ前に立つ正しい者」であるという確信を持っていました。

それに対してイエス様は、いいや違う。「アブラハムの子なら、アブラハムと同じ業をするはずだ。8:40 ところが、今、あなたたちは、神から聞いた真理をあなたたちに語っているこのわたしを、殺そうとしている。アブラハムはそんなことはしなかった。8:41 あなたたちは、自分の父と同じ業をしている。」と告げます。アブラハムの子孫ならば、どうして私を殺そうとするのか？私は神様の許から来た。神様の真理、神様の御心を告げているのに、どうして私を殺そうとするのか。それは神様に逆らうことではないか。アブラハムがそんなことをしたか？そんなことをしようとするのは、あなたたちがアブラハムの子孫ではないからではないか。あなたたちは誰の子、誰の子孫なのか。アブラハムの子孫でもないし、私を遣わされた天の父なる神様の子孫でもない。私を殺そうとする者があなたたちの父だ。それは私の天の父とは違う。別の者だ。そうイエス様は告げられました。

そもそも、イエス様はユダヤの民がアブラハムの子孫であることは認めています。イエス様は「あなたたちがアブラハムの子孫だということは、分かっている。」(8:37)と告げている通りです。つまり、血筋から言えばユダヤ人達は確かにアブラハムの子孫なのです。しかし、それが決

定的に重大なことなのか、救いの根拠になるのかということです。ここで私は洗礼者ヨハネがユダヤ人、特にファリサイ派・サドカイ派の人達に告げた言葉を思い起こします。洗礼者ヨハネはこう告げました。「虻の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。3:8 悔い改めにふさわしい実を結べ。3:9 『我々の父はアブラハムだ』などと思ってもみるな。言うておくれが、神はこんな石からでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる。」(マタイ 3:7～9) 大変激しく、厳しい言葉です。神様に救われる為に、血筋や血統など何の役に立つのか？石ころほどの意味しか無い。そんなことよりも、神様のみ前において自らの罪を認め、悔い改めることこそ、神様の憐れみによって救われる者の姿ではないかと洗礼者ヨハネは告げました。そして、ここでイエス様も同じことを告げられたわけです。

イエス様はユダヤ人達の誇り、自分たちがアブラハムの子孫であり、特別な神の民であることを否定されました。ユダヤ人達が自分たちは特別であり、神様の前に正しい者であり、救われるのが当然な者であると理解していたからです。もし自分たちが神様の御前に正しいのならば、そもそもイエス様がおいでになる必要はなかったわけです。十字架に架けられる必要もありませんでした。それにアブラハムに与えられた神様の約束は、「地上の氏族はすべて／あなたによって祝福に入る」(創世記 12:3) というものでした。自分たちだけが神様の祝福に与る、自分たちだけが神様に救われる。そういうものではありませんでした。アブラハムによって全ての民が神様の祝福に与るというものでした。イエス様は、全ての民を救うために来られたわけですから、まさにイエス様は神様がアブラハムに約束された祝福を実現のために、父なる神様によって遣わされということです。これが神様の御心であり、真理です。

#### 4. 神の子か悪魔の子か

ユダヤ人達は、自分たちがアブラハムの子であることを否定され、「わたしたちにはただひとりの父がいます。それは神です」(8:41) と反論します。自分たちはアブラハムの子孫であるだけでなく、「神の子である」と告げたわけです。先ほどお読みしました旧約における代表的な預言者イザヤが「あなたはわたしたちの父です。アブラハムがわたしたちを見知らず／イスラエルがわたしたちを認めなくても／主よ、あなたはわたしたちの父です。「わたしたちの贖い主」これは永遠の昔からあなたの御名です。」(63:16) と告げていますが、これは旧約における数少ない神様を「わたしたちの父」と呼んでいるところです。ユダヤ人たちは、旧約においてこのように告げられている通り、わたしたちの父は神様であり、自分たちは「神の子」であると受け止めていたわけです。しかし、残念ながらこのイザヤの預言は、イエス様によって罪を贖われ、神様が父となってくださるというイエス様によってもたらされる救いの現実を預言したものでした。それは 19 節で「どうか、天を裂いて降ってください。」と告げられていることから分かります。神様の御許から天を裂いて降ってこられたのは誰だったでしょう。それがイエス様でした。

このユダヤ人達の「自分たちは神の子である」という言葉に対して、イエス様はそこまで言いま

すか？と思うような激しい言葉で告げます。「あなたたちは、悪魔である父から出た者であって、その父の欲望を満たしたいと思っている。」(8:44) つまり、イエス様は「あなたの父は悪魔であって、断じて神様ではない。あなたたちは神様の御心になることを邪魔しようとする悪魔の欲望に従っているだけだ。だから、私を殺そうとしているのだ。」と告げました。はっきり「あなたたちは悪魔の子である」と告げられたわけです。これほど激しい言葉をもってユダヤ人達の思いを砕かれたのはどうしてでしょう？

この「あなたたちは悪魔の子だ」というのはたとえイエス様の言葉であったとしても、言い過ぎではないかと思われる方もいるでしょう。確かにひどい言葉です。私共は決して口にしてはいけません。実は、この言葉はヨーロッパにおいてひどく間違った用いられ方をしたという歴史的な事実があります。イエス様がユダヤ人を「悪魔の子」だ言われた。だから、悪魔の子であるユダヤ人は滅ぼさなければならない。そうしてユダヤ人の大虐殺が行われたのです。ナチスドイツによって行われた大虐殺は、当時のヨーロッパにいたユダヤ人の2/3にあたる600万人が殺されたといわれます。ホロコーストです。まことに痛ましく、キリストの教会はこの歴史を忘れることは赦されません。イエス様と論争したユダヤ人が自分たちは特別な者だ理解していたのと同じように「自分たちはキリスト者だから救われる。しかしユダヤ人は悪魔の子であり、神様に敵対する者だ。イエス様がそう言っている。だから、ユダヤ人は滅ぼされなければならない」とヨーロッパのキリスト者は考えた。それはナチス・ドイツだけの話ではありません。ユダヤ人迫害は何度も、様々なところで繰り返し起きてきました。これは全く間違っています。そもそも、自分の欲を満たすことを第一とし、神様の御前に自分は正しい者であると考え、悔い改めようとしない者、それが悪魔の子です。自らの罪を知らず、これを認めようとしない者、これが悪魔の子です。私は、ここに人間の罪が最も露わに現れていると思います。どこまでも自分は正しいと思いたい、これが私共の心の中の最も深い所の闇の中であらうごめく欲望です。これを罪と言います。この欲、この罪を誰もが持っています。例外はありません。つまり、私共は皆、神様・イエス様から見れば「悪魔の子」のような者であるということです。ですから、この「悪魔の子」という言葉は神様の救いに与る前の自分に対して言われるべき言葉であって、他の人に対して「あなたは悪魔の子だ」などと言える人など一人もいないということです。この言葉を口にすることが出来るのは、ただイエス様しかおられません。何故なら、元々「神の子」とはイエス様しかいないからです。それ以外の者は、皆「悪魔の子」だからです。しかし誤解してはいけないことは、神様は私共を「悪魔の子」として切り捨てられたわけではないということです。神の子であるイエス様が、悪魔の子であるような私共のために、ご自身を身代わりとして十字架にお架かりなったださった。その御業の故に、私共はただイエス様を「わが主、わが神」と信じるだけで、父なる神様がイエス様を復活させられたと信じるだけで、「神の子」としていただいたわけです。まことにありがたいことです。これが父なる神様の御心であり真理です。

## 5. 真理と偽り：「神様を信じる」と「自分を信じる」

さて、イエス様はもう一つ「真理」と「偽り」ということを告げられます。真理というのは、今申し上げましたように神様の憐れみによって、罪人である私共が救われる、神の子としていただけることです。「偽り」とは、それを認めないこと、それを受け入れないことです。どこまでも「自分は正しい」という所に立つことです。それは神様の御心に反し、イエス様に敵対してしまうことになります。イエス様が神様の御もとから来たことを信じ、イエス様が語られることを信じる。そこに救いに至るただ一つの道があります。一方、イエス様を信じないということは、自分のやり抜く力とか、自分の意思の強さとか、真面目さとか、正直さとか、自分の中にある良きものを頼りにすることです。それは「自分を信じる」ことだと言っても良いでしょう。イエス様は、それは「偽り」であって「真理」ではないと告げられます。

この「自分を信じる」ということですが、現代においては、良いことであり、それによって人は自分の道を開いていくことが出来ると受け止められているのではないのでしょうか。でも、本当にそうでしょうか？この「自分を信じること」が肯定的に、人間が自分の希望を実現していくために必要なこととして語られていることは、インターネットで「自分を信じること」と検索するとそれに関する名言とか、そうなれるための方法などが山ほど出てくることから分かります。しかし、それは本当に信ずべきお方である神様を知らないから、自分を信じるしかないということではないかと私には思えてなりません。聖書が告げ、イエス様が告げておられるのは、自分を信じるのではなくて、神様を信じるということであり、そこにこそ自由があり、平安があり、喜びがあり、救いがあるということです。

それは高齢になったり、病気になったりするとはっきり分かります。自分の力ではどうにもならないことを知るからです。その最大の壁は死です。イエス様と激論を交わしたユダヤ人達は、肉体の死を超える命について皆が信じていたわけではありません。現代の日本においてもそうでしょう。勿論、目の前の現実の問題は大切です。それに対してどう対応していくのか、私共は真面目に、真剣に考えなければなりませんし、全力で対応していかなければなりません。しかし、それが全てではありません。もっと大切なことがある。イエス様が問題にしているのは、生きている間に何を手に入れるかというようなことではありません。私共にはもっと重大なことがある。それが私共を創ってくださった神様の御前において、どう生きるか、神様がどう見てくださるのかということです。それが罪の赦し、肉体の死では終わらない永遠の命に繋がっているからです。この問題は「自分を信じる」ということではどうにもならないでしょう。神様・イエス様の恵みと憐れみを求めるしかありません。イエス様はそのことを告げておられるわけです。

## 6. 「父なる神よ」と祈る者とされて

私共は確かに「悪魔の子」のような者でしたけれど、しかし今は「神様の子」としていただいています。その証拠に、私共は天地を造られたただ独りの神様に向かって「父なる神様」と呼びかけ、

祈っています。「父」と呼びかけることが出来るのは「子」だけです。イエス様は天地を造られた神様に向かって「父よ」と呼びかけて良い、そのように呼びかけて祈りなさいと私共に教えてくださいました。イエス様が弟子たちに与えてくださった「主の祈り」は、「天にまします我らの父よ」で始まっています。これは重大なことです。私共は天地を造られた神様を「父よ」と呼ぶ、神様との親しい交わりを与えられているということです。そして、全知全能である神様が私共に「我が子よ」と呼びかけ、その憐れみの御手の中に私共を置いてくださっている。その恵みを知った者が、どうして「自分を信じる」という所に平安を求めることが出来ましょう。自分を信じて「自分は出来る」「自分は出来る」と自分に言い聞かせ続けなければならないとすれば、そこにまことの平安があるのでしょうか？

「神様の子」とされているということは、全知全能の神様を信頼して生きる者とされているということです。これに勝る平安はありません。私共には誇るべきものなど何もありません。何か秀でた才能や能力があるわけでもありませんし、高齢になって足腰も衰え、記憶もあやしいものです。とても自分に自信を持てるような状態ではありません。それでも自分を信じ、自分に自信があるとしたら、それこそ危ないでしょう。でも、それで良いんです。否、それが良いんです。私共は何も無い。しかし父なる神様が全てを持っておられ、その恵の御手の中で私共を生かしてくださっているからです。神様の恵みの御手は、私共を捕らえて放しません。神様の愛は実に徹底的です。ここに私共の揺るがぬ平安の源があります。この私共の道は御国へと続いていますけれど、その道は私共が切り開いていく道ではなく、向こうからやってくる道、向こうから開かれ続けていく道とでも言うべきものではないかと思わされます。私共は必死に頑張っ、ここまで来たわけではありません。勿論、それなりに頑張らなければならないともあったでしょうし、今もそれなりに頑張っているでしょう。しかし、それ以上に、いつも道が開かれて、ここにまで来た。それが私の実感です。2年前には宮崎に来るとは思っていませんでした。でも、今はここに居ます。思えば不思議ことです。私共を徹底的に愛してくださる父なる神様の御手の中に私共は生かされています。この神様の守りの御手は、私共の肉体の死を超えて捕らえて放すことはありません。ここに私共のまことの平安があります。ありがたいことです。

お祈りいたします。

恵みと慈愛に富たもう、全能の父なる神様。

あなた様は今朝、神様・イエス様を信じて「神の子」とされた恵みの中に生かされている幸いを教えてくださいました。ありがとうございます。どうか私共が自分を頼り、自分を誇り、自分が特別なものであるかのような思い違いから解き放ってください。まことに力ある方、私共が頼るべきお方はあなた様だけです。あなた様の恵みの御手の中に私共を置いてくださり、御国に至るまで私共の歩みを守り、支え、導いてください。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン